

色彩心理学



西田虎一著



造形社

TS112
4

色彩心理学



●西田虎一 著
造形社 刊

北京人民美术出版社



00107045

图书部藏书

原
版
书

西田虎一

日本染色文化協会理事長
大学美術教育学会名誉会員
元大阪教育大学教授

色彩心理学

昭和56年10月20日 初版発行

¥ 1,800

昭和57年12月10日 2刷発行

著者 西田 虎一

発行者 山本 和信

印刷 太平印刷社

製本 大沢製本所

発行所 造形社

〒168 東京都杉並区和泉 2-7-4

ハイコーポ明大明 106

振替東京 7-363 TEL (321) 6650

ISEN-4-88172-111-9 C3070 ¥1800E

序

私達人間のように眼をもつ動物の殆どは、あらゆる人工物・自然物・天然現象を見ることができる。万物・万象は、恒久的・半永久的長期的あるいは暫時的・瞬間的に、それぞれの形を示し、色を表す。

形はものを説明し、色はそれに内容を与えられているとおおり、形は色とともに物象を認知させ、色は万象の内容を指示して人々に種々の感情を起こさせ、性格にも大きく影響を与えるものである。

夏目漱石は、『世界は色の世界である。色を味わえば世界を味わったことになる』と言い、また『世界は色の世界であり、形は色の残骸である』とも言っているように、それぞれの物象から色を取り除けばどのように映じるであろうか、考えただけで世の中がすべて無味乾燥・無表情で、心の中が淋しく、おそろしさが迫ってくるようである。

漱石は風物の移り変わる多くの色をこよなく愛し、それらの色に最大の慰安を求めていたことは有名である。中でも澄みきった秋の空や月夜の空に心を強くひかれたことは、彼の文学書によっても明白である。彼の心は秋の空や月夜の空と緊密に交流し、一体となっていたようにさえ想像されるのである。彼の著『行人』に、「透きとおる空を眺めて、ああ生き甲斐のある天だと嬉しそうに真青な頭の上を眺めた」というところがあるが、漱石の書に接するたびに彼の空への純情がひしひしと胸に迫ってくるのを感じる。彼の崇高な文学の中核

をなすものは、巷より遙か離れた遠く高くにある色彩からの诗情であることは疑う余地がない。

如何に理を究め、微を尽くした理論的解明も、それによって感情を動かすことは難しい。感情に訴えるもの、人々を心の底から動かし得る力は、芸術行為か宗教行為以外は実に微々たるものである。

色彩は、それぞれの色に固有の心理的な力をもっているほか、人それぞれ伝統によって心の中に植えつけられた強い象徴力を持っている。これらの力が色彩感情の基本となっているものと考えられる。

芸術特に造形芸術における色彩の機能については、色彩と精神分析という課題に取り組みねばならない。また色彩のかもし出す感情効果や性格への影響については、これを心理学的研究へ近づけなければならないのは当然であり、ここから心彩心理学という学問の新分野が生まれたのである。

色は異なるに従ってそれぞれ異なる性格を持っている。この異なった性格が単独または複合されて人々の感情にそれぞれ違った気分を呼び起こし、この呼び起こされた気分が人々の総べての生活に大なり小なり影響を与える。その影響される方向や強さは人によって一様ではないが、一般的には強力に影響するもので、そのため色彩が多くの医療に効果のあることが、生活の知恵によって未開の時代から行われ、現在では医学の進歩と心理学の進歩により、精神病をはじめ多くの病種に有効な療法として用いられている。

このほか、勉強を高能率化するための勉強室の色彩、災害防止と能率増進のための工場色彩、顧客誘致に効果ある店頭店内の配色、購売力をそせるショーウィンドーの色彩、客の廻転をよくするための喫茶店の色彩、雰囲気を高揚して顧客を引き止めるナイトクラブの色彩、家畜や野菜の成長を促進させる色彩など、好ましい色彩管理による感情への効果は数えきれないほどである。

以上のとおり、色彩の心理的機能を有効に活用することは、色彩を直接扱う人々はもちろん、色彩には直接縁のない人々、更に如何なる仕事に従事する人々にも意義があり価値のあることを考えてみてほしいのである。被服や携帯品などの色によってその人の趣味や嗜好・性格の知り、彼との交友を高め、親近

感を深めることもそのひとつであり、セールスマンが、訪問先の主婦のドレスやインテリアの色彩などから、彼女の趣味・嗜好・性格を判断し、彼女の趣味・嗜好に合った商品を選び、性格に応じた訪問法を用いることによってセールス効果を上げるなども色彩心理学の効果である。

色彩心理学の効果は以上のほか、自らの気品を高め、インテリアその他環境のすべてを快適にして子女の豊かな成長を助け、来客に好感を与えて対人関係を好ましくし、ひいては社会を明るくすることにもなるのである。

本書は、長期に亘る大学での講義や各研究団体での講演の体験に基づき、長期に及ぶ思索と実験と検証によってまとめたもので、大学におけるデザイン学科・工芸学科・美術学科のテキストとし、デザイナー工芸家美術家、造形芸術関係の先生方はもちろん、あらゆる職場とくに対人関係を多く持つ方々の座右の書として有効であると思うのである。

著 者

序	i
I 章 心理学寸説	1
1. 心の意義	1
2. 心	2
3. 精神の発達と個性	3
4. 精神構造	5
5. 靈魂	6
6. 実験心理学	7
7. 意識心理学	8
8. 作用心理学	9
9. ゲシュタルト心理学	9
10. 心層心理学	10
11. 機能心理学	12
12. 行動主義の立場と現代心理学の動向	12
13. 要約	13
II 章 芸術のための心理学	15
1. 美とその有用性	16
2. 美価値と快楽	18
3. 美と崇高	19
4. 知能と創造性	20
5. 性格	22
6. 感情と情動	26
7. 想像	27
8. 夢	28

9. 共感	30
10. 感情移入	34
III 章 色と感情	35
1. 心理的環境と現象	36
2. 色と嗜好	37
3. 視知覚における感応	38
4. 主観色	38
5. 色彩と機能	39
6. 色に伴う感情	42
7. 色と味	67
8. 色の面積効果	69
9. 色の視認度	71
10. 色の注目性	74
11. 色彩と記憶	75
12. 色の連想と象徴	76
13. 色の象徴と生活への浸透	82
14. 共感覚	86
15. 花ことば	88
16. 色の適応と効果	99
17. 色の嗜好に関する研究	100
IV 章 色彩と性格	105
1. 色彩型と形状形	105
2. 性格と個人差	106
3. 色の好みと性格・性別	110

viii 目 次

4. 個々の色と性格.....	111
5. 色彩象徴テストによる色と性格.....	116
6. 描画に表れた色と性格	116
7. 描画分析規準の色彩要素	119
V 章 色彩における機能主義	123
1. 色の見分けの易否	123
2. 眼の疲労	124
3. 色彩の生理的・心理的効果	124
4. 色彩の科学的利用と色彩調節	125
VI 章 色彩調節	127
1. 色彩調節の歴史.....	128
2. 色彩調節における基本的法則	129
3. 色彩調節の実施.....	132
4. 色彩調節の効果.....	133
5. 学校における色彩調節	134
VII 章 色彩とデザイン	139
1. 流行色と色名.....	139
2. 工業デザインの色設計画	148
3. 流行に関する志向性	153
参考文献	157
索 引	

I 章 心理学 寸 説

心理学とは心 (psyche プシケ) についての学問であるというのが最も端的な答え方である。この psyche というのはギリシャ神話にある恋愛の神 Eros らに愛された美しい少女のことで、これが心霊や靈魂、あるいは精神などという意味に使われている。psyche について、ギリシャでは p を発音しないのでサイキというのであるが、イギリスでは p を発音するのが普通であるから現在では殆どの学者はプシケと読んでいるようである。

1. 心の意義

心とは何かと問い返されると簡単に答えることは甚だ難しい。自分に心があるということは誰もが認めていることであるが、満足な答となとなかなか出てこないものである。それは、心とは実に多面的なものであると同時に実に複雑でとらえにくいものだからである。

そこで先ず、心という言葉に類似すると思われる幾つかの言葉をあげて心の意味を解明したいと思う。

辞書によると、精神については、①物質や肉体に対して心・魂のこと ②知性的・理性的・能動的・目的意識的な心の働き。気力。意気。根気……などと書かれ、魂については、①動物の肉体に宿っている心の働きを司ると考えられ

るもの。靈魂。靈。②精神。氣力。思慮分別とあり、意識については、①目ざめている時の心の状態、作用。②精神生活 ③自分自身の精神の直観。④広く心的生活の全体を指す……などと記され、心については、①知・情・意の作用をなすもの。人間の精神作用の基になるもの。またその作用。②知識・感情・意志の総体。故に肉体に対するもの。③思慮。おもわく。④気持ち。心持ち。趣向・性根……などがあげられている。

このように、心とは何かということを解明することは実に骨の折れることで、端的に説明することは不可能に近いものと考えられる。言いかえれば、心という言葉は定義という操作の枠外におかれるべきもので、定義することの不可能なもの、即ち無定義語であると考えべきであると思われる。

心を論ずることは固有の心のあり方を究明することで、そのためにはより組織的且体系的な取扱い、即ち心を科学することである。自己の心を対象としてその様相を解明しようとするとき、それは単に主観的な自己流の心を認めるばかりではなく、客観的把握によらなければならないのは当然で、そのためには心を捕えて行く上での態度や見方、捕えるための操作など、広範に亘っての実験観察や事例の調査研究は勿論、更には多面的な思索や憶測も必然的に要求されねばならない。

この心の学問である心理学も、その発展過程を見れば明らかであるように、心というものの取上げ方は実に多面的であり、その学問の内容や性格は極めて広くまた深いものであることが考えられるのである。

2. 心

幼い子供はまだ自然科学的な思想を受け入れてはいないし、また受け入れる迄には発達していないため、精神と物質、生物と無生物との区別がわからない。従って森羅万象が自分達と同様に泣き・笑い・悲しみ・喜び・憤るものと思っている。これは、あらゆる自然物は心意のある生物だと信じる説、即ち物活説と同じで、いわゆる擬人観の思想である。このような自然観は子供に限ら

ず未開民族にも共通したところがあり、われわれの祖先もまたこの思想を久しく持ち続けていたものと想像されている。

それがやがて無生物と生物との区別ができるようになり、物と心との差別が認められるようになり、そこで生物の中には物質とは異なる心というものが宿っていると考えるようになるのである。

昔から偉大な心を持った人達は、宇宙との語らいの中から宗教や芸術やさらに科学を生み出してきた。それらはさまざまな道を経ながらも、人類の精神遺産として人間の歴史を実りの多いものにしてきている。そうした先人達のように豊かな精神・心のときめきを持ち合わせてはいないにしても、自然に対し万象に対する感動の心は失いたくはない、と思われてならない。

感動は人生の苦しさや社会の厳しさに負けた心からは生まれるものではない。強固な精神に支えられたゆとりの心から生まれるものである。ゆとりの心とは、現実を包み込んでいく大きな心と言ってもよい。この大きな心が閉ざされた心の扉を開き生命を躍動させてくれるのである。美しさや、優しさ、真理、誠、正義の行動に、感動を持って答える豊かな心こそ、社会を潤し文化を高めていく偉大な源であると考えべきである。

心とはこのように偉大なものであると感じていても眼で見ることはい。けれども何かの実体ではなからうかという考えも生まれてくる。これが即ち、**靈魂**と考えられ名づけられているのである。

3. 精神の発達と個性

自律的人間への精神発達の過程を個性化と言われる。子供は生まれた瞬間は精神的には母親と一体である。けれども生理学的な分離の後には次第に心理的独立が起こる。

これが人間の個性化していく姿である。

個性化は身体的成熟と精神的発達を基礎としていることは明瞭である。けれどもこの発達や成熟の過程には、個人に孤独感・無力感を生ぜしめ、そのため

不安・恐怖などの感情を起こさせるものである。

人間の精神的発達、社会的環境や精神的な諸種の問題から、現実に慣れ且、親しんでいるものから離れて未知のものへと向う過程の中で成長していくのである。

社会的環境からの離別というのは、子供の頃の玩具・衣服・その他の所有物はもちろん、友達や先生・近隣の人達・稀には家族の人との離別なども考えられる。精神的世界からの離別としてその最も決定的なものは、彼等に対する他の人々の扱い方・口のきき方などであると思われる。

小学校へ行く頃になると、母親や家族との関係に友人との交遊が加わり、中学校へ入れば、親に対する子供・家族の一員という自己より、学校における生徒集団の中でのメンバーとしての自己が本来的自己となり、その後は友人の何人かとは離別して新しい友人が加わり、更には職場での上司・同僚・部下という関係が現れ、このようにして人間関係は不断の離別と新しい親交とが繰り返されて人となるのである。現代の文明社会は、その社会構造から個性化をとげた個人は生まれにくいと言われている。

フロムは、こう述べている。

「個性的な人間は自然に対して自発的な関係を積極的に結ぶはずである。けれども現代の社会状況では、人間は個性をすてて外界に没入せざるを得ないのではなからうか。大衆社会状況のもとで生きる人々の多くは、孤独を回避しようとして集団に没入する。大衆は自分の個性の足で大地に立とうとせずできるだけ単純な集団のシンボルに盲目的にしがみつく」

フロムが指摘しているような社会心理が、この社会を強力に支配していると感じられる点は確かにある。家庭という集団から、学校集団、さらに職場という集団、遊び仲間という集団においても、身近で確実らしく感じる集団に没入しがちである。これが現代社会心理的立場からは最も無難だからである。

このような社会構造は、パーソナリティ、即ち個性を持った立派な人間を育てることができるであろうか。現代社会心理学的概念で構成された現代人像は、あまりにも人間としての生命力や活力について悲観的にならざるを得ない

のである。

精神病学者であり心理学者でもあるフロイドは、「その自我海では、このような水々しさを失った枯渇した部分を超自我と呼び、人間性のこの部分は人間が自然的な生命力で生きようとすることに対する社会的圧力の反映だ」と述べている。

人間性が社会の単純な反映に過ぎないならば、固定的で大衆化された社会状況における人間の性質は、超自我的ノイローゼであるか、あるいは超自我との間でいつも臆病でびくびくしている一面と図々しい自我を合わせたようなものであろう。

このような社会構造における大衆は、単なる自動人形として何者かによって操作され続けるに過ぎない。けれどもこのような心理学者の見解は別とし、社会は完全な自動人形にすることはできないであろう。

人間は動物であり、自己の生命をどこまでも維持し、強力になろうとする一面をもっていることを忘れてはならないと同時に、高い知性と感性をもった動物であることを意識せねばならない。

大衆社会の現状における一人の人間の中で、現代大衆社会機構によって操作される一面と、人間としての自然的性質によってこれに反抗しようとする他の面とが互いに葛藤しあっていると考えることもできよう。

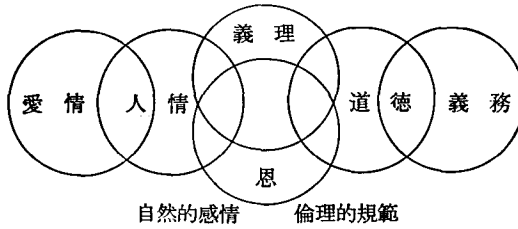
より高度な理想に向って、総ての人間が豊かな個性と高い叡智を発現せねばならないのである。

4. 精神構造

宮城音弥氏は、日本人の伝統的な精神構造を自然的感情と倫理的規範とに大別し、その関係をわかりやすくするために図I-1のように図示している。

日本人の生き方は、表面的な義務的・儒教的道徳と、内面的な自然的・人情的道徳という異なった二つのものを土台とし、この二つはしばしば相交錯する。その交錯するところに義理と恩とが位置すると言っているが、このような

図 I-1 日本人の伝統的な精神構造



愛情：親子・夫婦・友人などの間で、持ちつ持たれつで生きていこうとする自然の性質

人情：より広い人間関係における愛情の具体的なあらわれ

義理：好意に対して好意を返そうとする傾向。温い義理は人情の一部。冷たい義利例えばお義理で何かをするという場合などは次第に道徳に接近し、遂にそれと重なる。

恩：目上の人のお好意と解釈されるものに対して返礼しようとする傾向

道徳：社会的ルールに従って行動しようとする習慣

義務：同情や返礼といったものと離れた内的強制力

精神構造は総ての日本人の所有するところであり、戦後の人達もこの精神構造は殆ど変わってはいないであろうとしている。

5. 靈魂

肉体には靈魂が宿るという考えをいただくようになったのは、いつの時代からであるかは定かではないが、可成り古い頃に発生したらしく、エジプト王朝時代にはこの考えを示す記録が残されている。その頃の人の間では未だ学問的に靈魂を取上げるようなことではなく、素朴な信念や信仰の対象として扱われていたと想像される。それがやがて靈魂とは何であるか、肉体が死滅した後の靈魂はどうなるかということを考えはじめるようになると、それは単なる素朴な原始宗教というものではなく、心についての学問へ一歩踏みこんだものと言うことができる。

これが心の学問、即ち心理学という学問の生まれる遠い先祖であったと考ええて差支えない。

当時西洋ではギリシャの哲学、東洋ではインドの仏教思想にその姿をうかがうことができる。けれども仏教思想に芽生えた靈魂の研究は、合理的な科学としては発展することができず、科学としての心理学はギリシャ哲学が源泉となり、近代に至って心理学という学問の分野が確立されて今日に至っている。仏教思想によって芽生えた靈魂の研究は、新しい科学者の興味ある問題として最近超自然学の一方向に取上げられている。

6. 実験心理学

ギリシャに続く中世の宗教時代は、人間の自由な思想の凍結時代と言われるとおり、あらゆる学問・思想・芸術の総てがキリスト教的であったため、心の研究についても優れたものは残されていない。けれども文芸復興期を迎えるに及んで自然科学の研究活動が活発となり、1685年にはニュートンの万有引力説が完成され、光学に関する研究も1704年に発表されている。

このような自然科学の輝かしい成果に伴い、哲学界においても人間の認識作用についての考察があり、17～18世紀にはイギリスに経験主義の哲学が現れ、その中の幾人かは心理学の研究に全力を傾け、経験心理学を打ち立てている。経験心理学は、心は本来白紙の如きものであり、われわれの知識はすべて経験によって獲得されるものであるとし、一切の先入観念を排除し、心の仕組を自分の眼を通し耳を通して得るものであると標榜している。

これらの学者の開拓した心理学は、あとで連想心理学と呼ばれているが、その理由としては、心に表れる意識や観念は主として連想の仕組によって統御されるものであると説明しているところからである。

心は生まれた時には白紙であるが、外界の刺激を受けて感覚が生まれ、感覚が組合わされて種々の意識内容が心に書き刻まれ、この内容が観念として存在し、これが連想によって互いに提携しあい、それが意識として働くのであると

いう理論に基づくものである。

7. 意識心理学

心理学に実験法を取入れた自然科学に準ずる新しい心理学を打ち立てようとしたのはヴントである。彼は心理学を『直接経験の学』と呼んだが、その直接経験とは意識のことである。彼はまた自然科学を間接の学と呼んでいる。

自然科学の対象になる外界の存在やその性質などは、すべて意識の仲介として間接的に知られるものであるが、心理学の対象である意識そのものは、それを知るためには何の仲介も必要とせず直接に経験されるもので、従って意識は直接経験であり、そこで心理学を『直接経験の学』と言うのである。

意識はたしかに直接に体験されるものであり、経験心理学がその研究対象として意識を取上げたのは大いに理由のあることである。ヴントはこの意識がどのような構造をもつかを明確にすることを心理学の問題とし、自分の体験する意識を自らが観察することを自己観察の方法と言っている。即ち、被験者を一定の条件のもとにおき、その際に生起する意識を自己観察させる。このような観察方法を用いることによって実験心理学が成立するというのである。

彼は、物質が有限の幾つかの元素によって構成されているのと同じく、意識も有限の心理要素によって構成されているという見解に基づき、内観的に意識を分析すればよいと述べている。一定の条件下で生じた具体的意識を内観法によって分析していくと、最早それ以上には分析できない幾つかの単位意識内容に到達する。

この究極的な意識の断片が、それぞれその意識を構成している心的要素である。即ち、一輪の花を見るとき、葉の形、花卉の形、その形をつくっている幾つもの線、葉の色、花の色や匂いなどが意識にある花の構成要素であるとの見解に基づき、以上の観点に立って彼は意識を実験的条件のものとして分析し、要素を発見する仕事を行ったのである。